

京都中川の北山林業景観における民家の庭の特性

はじめに 文化遺産部景観研究室では2016年度から3年にわたり、京都市西北部の山間に位置する中川地区において文化的景観の調査を実施してきた。中川地区は磨丸太や垂木材に代表される北山丸太生産の拠点で、集落内約100戸のほぼすべての世帯が北山林業に関わってきた。本稿では林業関係者の庭に焦点をあて、その成果の一端を紹介したい。

今回の調査対象の民家10件はすべて林業関係者の家で、仕事師(山林労務者)や製造業者、問屋、山主など、様々な立場で北山林業に関わってきた。これらの民家の庭の特質をまとめた表6とともに、ここではその要点を抜き出して述べてみたい。

庭の構成と用途 中川は桂川支流の清滝川沿いに位置する。南北に細長い谷あいには立地し、平地は限られている。そのため、谷の斜面を造成し、ひな壇状に宅地がつくられている部分が多い。その造成の際に生まれた切土側と盛土側の法面に石積みを施して斜面を保護しつつ、できるだけ広い平坦面を得ている。

この細長い宅地に主屋と付属屋、蔵が配置される。家屋配置には大場¹⁾により5つのタイプが見出されているが、いずれも敷地の北寄りに南面して主屋を建て、その南側に付属屋を設ける点が共通する。今回の調査から庭は、A：主屋前面(南側)の前庭、B：主屋のザシキ側の庭、C：主屋のガイドコロ側の庭、という3つの庭から構成されることが分かった(図55)。

前庭は林業や日常生活の作業をおこなう空間で、その

一部を野菜栽培や園芸の場として利用している(図56)。敷地の5分の1から3分の1もの面積を占める多目的空間である。居間、居間の縁に面するため人目に触れやすいこと、また、作業スペースが広く手入れもしやすいことから、現在は野菜や花木、花苗、山野草などを育て、日常的に園芸を楽しむ場、可変性の強い庭となっている。

主屋ザシキ側の庭は座敷での仏事や盆の精霊迎えの際の通路にもなるため、通り道が確保される。前庭と露地門で区切られたり、飛石が打たれたりする場合もある(図57)。通路部分を確保した上で敷地境界側に台杉やアカマツなどの中低木などを植栽する。前庭に比べると可変性は少ない。

主屋ガイドコロ側の庭は囲炉裏部屋からの眺めが意識されることが多い。特に西向き斜面に立地する家では、谷水を利用した池を設け、切土斜面の石積みを庭の背景とする。No.6の家の石積みは下段を庭師が、上段を石積み職人が積んでおり、こうした例からも庭の要素と考えられてきたことがわかる(図58)。

山の恵みの取りこみ方 庭にはアカマツや台杉が植えられていることが多く、中川の山の植生をよく表している(図59)。特に台杉は10例中8例で植栽されていた。以前は台杉を庭木としてとらえることはなかったが、昭和30~40年頃から庭に移植するようになったという。その時期、京都市内の造園業者から山の台杉を購入したいという要望を引き受ける中で、中川でも自邸の庭に台杉を植えるようになった。山では4~5mほどの樹高だった台杉を2~3mほどに小さく仕立てて庭園樹木としている。アカマツや台杉以外では、No.7の家のヒイラギの古

表6 民家の庭の特質

民家の番号	庭の要素			植栽			京都との関係	
	露地門	飛石	池	台杉	アカマツ	山野草	接待の有無	市内造園業者の利用
1	○	○	×	○	×	○	×	×
2	○	○	○	○	○	×	○	○
3	○	×	○	×	○	○	×	○
4	×	×	△	○	×	○	×	×
5	×	×	○	○	△	○	×	×
6	○	×	○	○	○	×	×	○
7	×	×	○	○	○	○	○	○
8	×	○	△	○	○	○	×	○
9	×	○	×	○	○	○	×	○
10	×	×	×	×	×	○	×	×

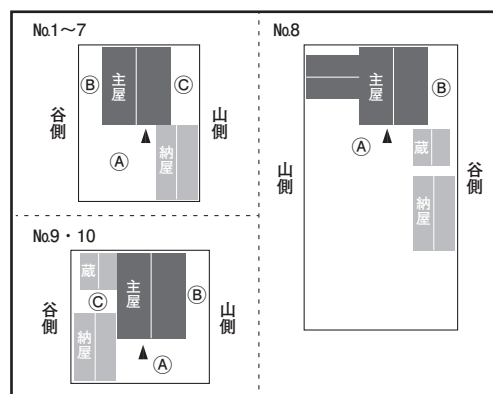


図55 庭の模式図



図56 作業場を兼ねる前庭



図57 露地門と飛石



図58 庭師が積んだ石積み（下段）



図59 山主の家のアカマツと台杉



図60 真木として据えられたヒイラギの古木



図61 多様な山野草の栽培

木のように、所有する山林から移植した樹木を庭の真木として据える例もあった(図60)。

中川の庭づくりで最も驚くべきことは、山野草の栽培がとても盛んで、しかもその多くが自身による採取によるということである。今回の調査だけでも、イカリソウ、イワカガミ、エビネ、ガクアジサイ、クマガイソウ、クリソウ、ササユリ、シャクナゲ、シュンラン、セッコク、ドウダンツツジ、モツツジなど、多様な山野草が確認できた(図61)。山野草の採取栽培がおこなわれていないのは10例中2例のみであった。育林のため頻繁に山に入ることで、山野草の採取を容易にしてきたと考えられる。また、山野草の自生環境に近い中川地区の自然条件も、栽培しやすさの背景にある。

ヒアリング調査を重ねるなかで、中川で山野草の栽培には山本徳次郎氏という先駆者がいたことも分かった。山本氏は山主の家の14代目で、昭和35年頃から花やキノコを栽培したり養蜂をしたりしていたという。昭和50年頃からの山野草栽培の全国的なブームも影響し、ただの雑草と思われていた山野草に価値を見出し、採取栽培が広まっていったと考えられる。

京都との関わり方 中川の産地問屋や生産業者は、京都を中心に全国から買い付けに来る問屋などに対して、自宅で接待をしていた。ダイドコと呼ばれる囲炉裏部屋ですき焼きや鯉料理でもてなし、遠方からの客には離れ座敷で宿泊してもらったという。中川で産地問屋が生まれるのは大正期で、その頃から庭も来客を意識してより整えられていったと考えられる。

そうした庭の手入れは、一部の仕事師の家を除き、中川に隣接する右京区の梅ヶ畑や鳴滝の造園業者に依頼さ

れる。梅ヶ畑や鳴滝から山越、嵯峨にかけての一带は京都のなかでも造園業者が最も多いエリアである。明治35年(1902)に周山街道が開通したことで行き来が容易になったことも要因にあると考えられる。

小 結 今回の調査から中川の庭は、主屋の前庭、主屋ザシキ側の庭、主屋ダイドコ側の庭と、おおむね同じパターンで配されていることがわかった。前庭は日常的に野菜や花卉などの園芸をおこなう場として、主屋の東西に配される庭は観賞性の強い庭として用いられる傾向にある。

こうした庭での台杉や花卉の栽培は昭和30年代以降におこなわれるようになった。北山丸太の販売により生活に余裕が生まれたことや、台杉や山野草が観賞用として見出されるなかで、中川の林業関係者の間にも普及した。特に山野草は谷あいという栽培に適した自然条件と、林業を生業とするために入手が容易なことから広まったと考えられる。そもそも「園芸林業」とまで呼ばれる緻密な育林をおこなってきたスペシャリストたちだからこそ、知識と技術が求められる山野草の栽培に面白みを見出しやすかったのだろう。

現在、中川をはじめとする北山の山林では、シカやイノシシなど野生動物の採食により下層植物が激減している。中川の林業関係者の庭は、北山の山野草の待避地と言っても過言ではないかもしれない。(恵谷浩子)

註

- 1) 大場修『中川北山町の集落・民家・杉丸太小屋－京都・北山杉の里集落の文化的景観とその再生活用のための基礎的研究－』京都市立大学地域貢献型特別研究成果報告書、2010。